
たった一人の.....

B J

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たった一人の……

【Nコード】

N7299I

【作者名】

B J

【あらすじ】

俺は彼女が好きだ。

好きで好きで堪らない。

俺は……彼女に告白する。

彼女に過去を……父親を……思い出させる。

一体何があったのか。

これは短編小説だと思って下さい

始まり（前書き）

BJです。

五作目になりました。

読者様に読んでもらえると嬉しいです。

感想・評価等をお待ちしております。

始まり

「……怖い……怖いよ！苦しい助けて……」

彼女が泣いているのに俺は何も出来なかった。

「……君の事が好きだ。付き合っ
て欲しい」

俺は彼女、なかむら中村 みか美香に告白した。

「……ごめんなさい」

「えっ？」

俺は彼女に振られたのだ。

「……なんで」

「いきなりはちょっと……まずは友達から始めよう？」

彼女はそう言っ
て俺に微笑む。

俺は不満ながらも頷いた。

彼女と俺が片想いの友達をして半年。

俺の想いは今も昔と変わらず彼女の事が好きだった。

でも、あの日以降からまだ告白はしていない。

あの日と比べたら彼女との距離は近くなったのかもしれない。

でも、それは当たり前だ。

友達になったのだから……

まだ付き合ったり出来る距離じゃない。

それ程彼女との距離は大きかった。

この半年で分かった事、彼女は景色に惚れやすい事だけだ。

一つでも分かった事が幸せだと考える人がいるらしいが俺はもっともっと彼女の事が知りたい。

欲深だと言っのだろう。

それが俺だ。

それが人だ。

人は欲望の塊だとよく言った者だ。

でも、人はそれを欲深と言う。

何が可笑しい？

何が悪い？

お前も俺と同じだ。

ただ気付かないだけで、人は皆同じだ。

何処かで人は欲を出す。

それが人間。

「……どうした？」

美香が心配そうに俺の顔を覗き込む。

友達になって少ししてから俺達は名前で呼び合う様になった。

別に何かガキツカケで呼び合う様になった訳ではない。

美香は前から友達の名前で呼ぶ人だったから自然とこうなっただけ。

……俺だから特別名前で呼び合う訳じゃない。

分かっている。

分かっているけど俺だから名前で呼んでくれると思いたくなる。

俺はかなり重症の様だ。

「何が？」

「いやっボーとしてたから」

「……何も無いよ」

俺は美香に笑顔を見せる。

「そっか……何も無いなら良いんだ。悪かったな」

「別に謝らなくても良いよ。心配してくれてありがとな」

「いやっ別に感謝される様な事してねえし」

美香はそう言って俺から目を外す。

「じゃあ行くこつぜ」

美香が俺達が向かう場所を指差しながら言った。

俺達が向かった先は映画館だ。

美香が一人で入るのは嫌だからと俺を誘ってくれた。

美香が俺に気を使ったのは分かっている。

いつもなら誤解されない様に女友達と来るらしいが俺が美香の事を好きだから普通の男友達よりも近くに居て知ろうと時々こつやって

誘ってくれる。

そのせいで俺と美香が付き合っているという疑惑が立った事がある。
俺からは最高のこの上無い疑惑だ。

でも、美香からは……………

どう想っているのかはわからない。

分かりたくない。

絶対、俺にとって良い事ではない。

それだけはハッキリ言えた。

じゃあ離れたら良いと思うかもしれないがそれは出来ない。

俺が嫌だ。

自分勝手な理由だけどそれは決してしたくない。

美香の口で聞くまでは…………

でも美香は嫌な顔一つせず俺を誘ってくれる。

苦しいが俺はそれに縋る。

俺が美香の近くに来てから美香の友達の何人かが美香から離れて行った。

理由は知らない。

美香に聞いた時があつたが美香は

『愛想をつかれただけ』

とあの時、俺が告白した時と同じ様に微笑んだ。

離れた理由は今もわからない。

俺が干渉して良い事なのか。

俺のせいでこうなったのか。

わからなかった。

誰も答えてくれなかった。

俺は美香の後をついて行く。

突然

映画が終わって俺と美香は外に出ている。

「さて……バスケでもしない？」

美香が俺を見て言う。

「何故にバスケ？そんな伏線なかったぞ」

「映画見てたから体が硬くなって、動かしたいんだ」

「……じゃあバスケするか」

日も暮れて来たので俺は美香を送る事になった。

「……悪いな。わざわざ送ってもらって」

美香が俯きながら言う。

「別に良いよ。俺が送りたいって言ったんだし」

そう言うと美香は苦笑いをして見せた。

美香が不意に足を止める。

「美香？どうした？」

俺が尋ねるが美香は答えない。

美香が見ている方を見るが何も・・・誰もいない。

それ以前に美香の眼には何も映っていない様にも見える。

美香が口を手で覆い隠す。

・・・突然、美香が走り出した。

「美香！」

俺は美香を追いかける。

行き着く先は美香の家だった。

美香は走りながら家に入る。

「美香！」

俺は扉を何度も叩く。

扉を開け様と何度も引くが鍵を閉められていて開かない。

「美香！美香！！どうした！大丈夫か！開けてくれ！」

何度も扉を叩くが返事も鍵を開ける事も何もない。

誰もいなかった様な感覚までして来た。

俺はこの時、

恐いと感じてしまった。

美香が俺の前からいなくなってしまうのではないかと

俺はさっきよりも強く扉を叩く。

扉は開く所か人が集まって来た。

その中に携帯電話を取り出している人がいた。

俺は警察を呼ばれると思って走って逃げた。

もし、警察に捕まったりしたら美香とは会えなくなってしまう。

「美香・・・美香・・・美香・・・」

俺は何度も美香の名前を呼んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

静かな家の中で水の音だけが響く。

最後

「……………」

電話に出ない。

「……………」

俺は何度目かもわからないぐらい美香にかけ直す。

「……………」

やっぱり出ない。

「……………」

俺は美香の家に向かう。

インターホンを鳴らしても誰も出ない。

俺は希望を乗せてドアノブに手を掛ける。

開いた。

俺は一呼吸置いてから中に入る。

家の中は明かりが点いている。

つまり、誰か居る事を現している。

俺は一つ一つ部屋数を潰す。

そして・・・

倒れている美香を発見した。

「・・・美香っ！！！」

俺は半ば叫び声で美香を呼び、駆け寄る。

「美香？・・・美香！・・・美香！！」

摩っても反応が無い。

「どっしよ・・・救急車っ！」

俺は携帯電話で救急車を呼んだ。

何も変えられない。

俺は自分の無力感に涙まで出て来た。

俺は必死に涙を拭う。

こんな姿を美香の前で見せる訳にはいかないから

俺は美香の病室で美香の母親と一緒にいた。

俺は何度も心の中で美香を呼ぶ。

あの日から数日後。

美香は目を覚ましたとの報告が美香の母親からあった。

俺は走って美香の病室まで行く。

「美香！」

俺は勢いよく病室の扉をスライドさせる。

「・・・おう。久しぶり？かな」

美香は最初こそ突然の登場で驚いていたがすぐに笑顔で挨拶してくれた。

「・・・ああ、久しぶり」

俺の顔からは笑みがこぼれる。

「それにしても慌てすぎだろ。目を覚まさない訳じゃないんだから」

美香が何か言っているが俺の気持ちは変わらない。

嬉しいのだ。

仕方ない。

この気持ちはたとえ美香でも止められない。

「・・・・・・美香・・・・・・おかえり」

「・・・ただいま」

病室だったが俺は楽しかった俺が面白いネタを持って来て美香と共に笑った。

・・・・・・病気という単語を頭から消す為に・・・・・・

でも、病気は忘れさせてくれなかった。

美香に発作が起きたのだ。

医者の先生に死刑宣告を受けた。

『後、長くて一ヶ月です』

それを聞いた美香の母親は病気を知った時と同じぐらい泣いた。

俺は泣かなかった。

自分でも驚いた。

泣いても仕方ないと病気の事を聞いた時に十分理解したからだろうと納得した。

「ごめんね。ごめんね。美香」

美香の母親が自分を責める。

「別にあなたのせいじゃありませんよ」

美香の父親はもうこの世にいないから俺が代わりに励ます。

すると、美香の母親は首を横に振る。

「私のせい。美香の父親も肺ガンで私の前から居なくなった・・・
今度は美香が・・・」

「・・・あなたのせいじゃありません・・・誰のせいでもあり
ません・・・仕方ない事だったんです」

俺は深く息を吸って・・・

「運命だったんです」

勢いよく吐いた。

それは仕方ない事。

それは運命。

受け止めるしかない事実。

美香の母親に言い聞かせる様に言ったが

本当は自分に言い聞かせていた。

本当に悪いのは俺の方だ。

俺が彼女を欲したから、

俺が彼女を好きになつたから、

俺が………

美香は麻酔が切れて目を覚ました。

美香の母親が美香に駆け寄る。

「美香、ごめんね。ごめんね。ごめんね」

美香の母親が必死に謝っている。

美香は美香の母親の頭に手を乗せて……

「大丈夫だよ」

と声を掛けた。

一番辛いのは彼女の方なのに

一番泣きたいのは彼女の方なのに

一番苦しいのは彼女の方なのに

一番慰めて欲しいのは彼女の方なのに

彼女、美香は美香の母親を慰めていた。

美香の母親は一安心して今日は帰ろうとするのに俺もついて行くこととしたら美香が・・・

「智史。少し話せるか？」

智史。^{さとし}俺の名前だ。

「ああ」

病室には俺と美香の二人だけ

「・・・智史・・・私の病気の事は聞いたんだろ？」

「聞いた」

「・・・じゃあ、一つだけお願いがあるんだけどいいか？」

「何？」

「・・・母さんにはああ言ったけど泣いてもいいかな？」

やっぱり、そうだよな。

死ぬ事になるんだ。

恐いの当たり前だ。

泣きたくなるだろう。

だったら、俺がする事といえば・・・

俺は美香を抱きしめた。

「ああ」

そう言った途端に美香から嗚咽が聞こえ始めた。

俺は強く強く抱きしめた。

美香が泣き止んでから少しして美香が口を開いた。

「・・・本当は、前から気づいてた・・・あの映画の日。私途中で走って帰っただろ？あの時、何かが出て来る感じがした後突然気分が悪くなったんだ。ごめんな」

「・・・別にいいよ」

「・・・智史・・・私・・・」

「何？」

「・・・恐い・・・恐いよ！苦しい助けて・・・」

美香がまた、泣き出した。

苦しむ彼女を俺にはどうする事も出来なかった。

「……最後のお願い……智史……もう此処には……来ないで」

「何を言っ……」

「また会ったら！……私、死にたくなるから……もう、此処には来ないで……お願い、だから」

「だったら、余計に会うべきだろ！……そんなお願い聞きたくない！」

「智史だって！……もう、私が死ぬ事分かってるでしょ！だから……これ以上……苦しめないで……」

最後はもう吐き捨てる様に呟いた。

「……私……智史の、事……」

美香と俺が友達になった時と同じ笑顔で……

「……大っっっっっっっっ嫌い！！」

「……………」

俺は何も言えなかった。

確かに俺は美香に好かれる様な事はしていない。

美香が俺を嫌いになるのは当たり前前の事だ。

……俺は……何故……何もしなかったのだろう。

彼女の為に俺が出来る事……

「…………それが……美香の願いなら……」

俺は病室をゆっくりと出て行った。

「……………ごめん……………智史……………私……………智史の事……………
……………好きだよ……………」

あの日から三週間後。

俺は美香と会った。

美香は死体として……

最後（後書き）

最後まで読んで頂いてありがとうございます。

もう、感謝！感謝！です。

この『たった一人の……』を読んではどうでしたか？

感想をくれたら嬉しいです。

では、また何処かでお会いしましょう！……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7299i/>

たった一人の.....

2010年10月10日01時08分発行